

阿部一族

森鷗外

青空文庫

従四位下 左近衛少将兼越中守 細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、よそ
 よりは早く咲く領地肥後国の花を見すてて、五十四万石の大名の晴れ晴れしい行列に前
 後を囲ませ、南より北へ歩みを運ぶ春とともに、江戸を志して参勤の途に上ろうとして
 いるうち、はからず病にかかつて、典医の方剤も功を奏せず、日に増し重くなるばかりな
 ので、江戸へは出発日延べの飛脚が立つ。徳川将軍は名君の誉れの高い三代目の家光で、
 島原一揆のとき賊将天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を気づかい、
 三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後守、阿部対馬守の連名の沙汰書を作らせ、
 針医以策というものを、京都から下向させる。続いて二十二日には同じく執政三人の署名
 した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門という侍を上使につかわす。大名に対する将軍家の
 取扱いとしては、鄭重をきわめたものであつた。島原征伐がこの年から三年前寛永十
 五年の春平定してからのち、江戸の邸に添地を賜わつたり、鷹狩の鶴を下されたり、ふ
 だん懇懃を尽くしていた将軍家のことであるから、このたびの大病を聞いて、先例の許
 す限りの慰問をさせたのも尤もである。

将軍家がこういう手続きをする前に、熊本花畑の館では忠利の病が革かになつて、とう

とう三月十七日申さるの刻ときに五十六歳で亡なくなつた。奥方は小笠原おがさわら兵部大輔ひょうぶたゆうひでまさ秀政ひでまさの娘を
 將軍が養女にして妻めあわせた人で、今年四十五歳になつてゐる。名をお千せんの方かたという。嫡子ちやくし
 六丸は六年前に元服して將軍家から光みつの字を賜たまはり、光貞みつさだと名のつて、従四位下侍じしゆう従
 兼肥ひこのかみ後守ごまもりにせられてゐる。今年十七歳である。江戸參勤と中で遠江と国と浜松とまで帰つ
 たが、訃音ふいんを聞いて引き返した。光貞はのち名を光尚みつひさと改めた。二男鶴千代つるちよは小さいと
 きから立田山たいしやうじの泰勝寺たいしやうじにやつてある。京都妙心寺出身の大淵たいえん和尚おしやうの弟子になつて宗
 玄そんといつてゐる。三男松之助は細川家に旧縁のある長岡氏に養やしわれてゐる。四男勝千代は
 家臣南条大膳だいぜんの養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姫ふじひめは松平周防守すおうのかみ忠弘
 の奥方になつてゐる。二女竹姫はのちに有吉ありよし頼母たのも英長ひでながの妻になる人である。弟には忠
 利さんさいが三齋さんさいの三男に生まれたので、四男中務なかつかさ大輔たゆうたつたか立孝たつたか、五男刑部ぎやうぶ興孝おきたか、六男長
 岡式部よりゆき寄之よりのきの三人がある。妹いもとには稲葉いもと一通かすみちに嫁した多羅姫たらひめ、鳥丸からすまる中納言ちゆうなごん光賢みつかた
 に嫁した万姫まんひめがある。この万姫の腹に生まれた禰々ねね姫ひめが忠利の嫡子光尚の奥方になつて
 来るのである。目上には長岡氏を名のる兄が二人、前野長岡両家に嫁した姉が二人ある。
 隱居三齋そうりゆう宗立そうりゆうもまだ存命で、七十九歳になつてゐる。この中には嫡子光貞のように江
 戸にいたり、また京都、そのほか遠国にいる人だちもあるが、それがのちに知らせを受け

て歎なげいたのと違って、熊本の館やかたにいた限りの人だちの歎なげきは、わけて痛切なものであった。江戸への注進には六島少吉、津田六左衛門の二人が立った。

三月二十四日には初七日しよなぬかの営みがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床とこい板いたを引き放つて、土中に置いてあつた棺かんを昇かき上げて、江戸からの指図さしずによつて、鮑田あきたご郡おり春日村かすがむら 岫雲院しゅううんいんで遺骸いがいを茶だびにして、高麗門こうらいもんの外の山に葬まうつた。この靈屋みたまやの下に、翌年の冬になつて、護国山ごこくざん妙解寺みょうげじが建た立たせられて、江戸品川東海寺しんがわとうかいじから沢た庵あん和尚おしやうの同門の啓室和尚けいしつおしやうが来て住持ぢゆうぢになり、それが寺内の臨流庵りんりゅうあんに隠居いんこしてから、忠利の二男で出家しんげしていた宗玄そうげんが、天岸和尚てんがんおしやうと号して跡あとつぎになるのである。忠利の法号は妙解院みょうげいん殿でん 台雲宗伍大居士たいうんそうごだいこじとつけられた。

岫雲院しゅううんいんで茶だびになつたのは、忠利の遺言によつたのである。いつのことであつたか、忠利ちゆりが方目狩ばんがかりに出て、この岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。そのとき忠利はふと髯あごひげの伸びているのに気がついて住持ぢゆうぢに剃刀かみそりはないかと言いつた。住持ぢゆうぢが盥たらひに水を取つて、剃刀かみそりを添そえて出した。忠利は機嫌きげんよく児小姓こしやうに髯あごひげを剃そらせながら、住持ぢゆうぢに言いつた。「どうじゃな。この剃刀かみそりでは亡者もうじやの頭あたまをたくさん剃そつたであらうな」と言いつた。住持ぢゆうぢはなんと返事へんじをしていいかわからぬので、ひどく困こまつた。このときから忠利は岫雲院の住持ぢゆうぢと心

安くなつていたので、茶だびしよ所をこの寺にきめたのである。ちようど茶の最中であつた。柩ひつぎの供をして来ていた家臣たちの群れに、「あれ、お鷹がお鷹が」と言う声がした。境けいだ内の杉すぎの木立ちに限られて、鈍い青色をしている空の下、円形の石の井筒いづつの上に笠かさのようには垂れかかつている葉桜の上の方に、二羽の鷹が輪をかいて飛んでいたのである。人々が不思議がつて見ているうちに、二羽が尾くちばしと嘴くちばしと触れるようにあとさきが続いて、さつと落して来て、桜の下の井の中にはいつた。寺の門前でしばらく何かを言い争つていた五六人の中から、二人の男が駈かけ出して、井の端はたに来て、石の井筒に手をかけて中をのぞいた。そのとき鷹は水底深く沈んでしまつて、齒しだ朶だの茂みの中に鏡のように光っている水面は、もうもとの通りに平らになつていた。二人の男は鷹たかじょうしゅう匠じょう衆しゅうであつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛していた有明ありあけ、明石あかしという二羽の鷹であつた。そのことがわかつたとき、人々の間に、「それではお鷹も殉じゆんし死したのか」とささやく声が聞えた。それは殿様がお隠れになつた当日から一昨日おとついまでに殉死した家臣が十余人あつて、中にも一昨日は八人一時に切腹し、昨日も一人切腹したので、家中かちゅうたれ誰にん一人殉死のことを思はずにいるものはなかつたからである。二羽の鷹はどういう手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物えものを追うように、井戸の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿せん鑿さく

しようなどと思うものは一人もない。鷹は殿様のご寵愛なされたもので、それが茶の当日に、しかもお茶所の岫雲院の井戸にはいつて死んだというだけの事実を見て、鷹が殉死したのだという判断をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする余地はなかつたのである。

中陰の四十九日が五月五日に済んだ。これまでは宗玄をはじめとして、既西堂、金両堂、天授庵、聴松院、不二庵等の僧侶が勤行をしていたのである。

さて五月六日になつたが、まだ殉死する人がぼつぼつある。殉死する本人や親兄弟妻子は言うまでもなく、なんの由縁もないものでも、京都から来るお針医と江戸から下る御上使との接待の用意なんぞはうわの空でして、ただ殉死のことばかり思っている。例年簷に葺く端午の菖蒲も摘まず、ましてや初幟の祝をする子のある家も、その子の生まれたことを忘れたようにして、静まり返つてゐる。

殉死にはいつどうしてきまつたともなく、自然に掟が出来てゐる。どれほど殿様を大切に思えばといって、誰でも勝手に殉死が出来るものではない。泰平の世の江戸参勤のお供、いざ戦争というときの陣中へのお供と同じことで、死天の山三途の川のお供をするに

もぜひ殿様のお許しを得なくてはならない。その許しもないのに死んでは、それは犬死である。武士は名聞みやうもんが大切だから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死うちじにをするのは立派ではあるが、軍令にそむいて拔駈ぬけがけをして死んでは功にはならない。それが犬死であると同じことで、お許しのないに殉死しては、これも犬死である。たまにそういう人で犬死にならないのは、境遇ちくうを得た君臣の間に默契があつて、お許しはなくてもお許しがあつたのと変らぬのである。仏涅槃ぶつねはんのちに起つた大乘の教えは、仏のお許しはなかつたが、過現未かげんみを通じて知らぬことのない仏は、そういう教えが出て来るものだとして許よしておいたものだとしてある。お許しがないのに殉死の出来るのは、金口こんぐで説かれると同じように、大乘の教えを説くようなものであろう。

そんならどうしてお許しを得るかというところ、このたび殉死した人々の中の内藤長十郎元もと続とつぐが願つた手段などがよい例である。長十郎は平生へいせい忠利の机廻りの用を勤めて、格別のご懇意をこうむつたもので、病床を離れずに介抱をしていた。もはや本復は覚束おぼつかないと、忠利が悟つたとき、長十郎に「末期まつしが近うなつたら、あの不二と書いてある大文字の懸物かけものを枕もとにかけてくれ」と言いつけておいた。三月十七日に容態が次第に重くなつて、忠利が「あの懸物をかけえ」と言つた。長十郎はそれをかけた。忠利はそれを一目見

て、しばらく瞑目めいもくしていた。それから忠利が「足がだるい」と言った。長十郎は搔卷かいまきの裾すそをしずかにまくつて、忠利の足をさすりながら、忠利の顔をじつと見ると、忠利もじつと見返した。

「長十郎お願いがござりまする」

「なんじゃ」

「ご病気はいかにもご重体のようにはお見受け申しますが、神仏の加護良薬の功験で、一日も早うご全快遊ばすようにと、祈願いたしております。それでも万一と申すことがござりまする。もしものことがござりましたら、どうぞ長十郎奴めにお供を仰せつけられませうに」

こう言いながら長十郎は忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額ひたいに押し当てて戴いた。目には涙が一ぱい浮かんでいた。

「それはいかんぞよ」こう言つて忠利は今まで長十郎と顔を見合わせていたのに、半分寝返りをするように脇わきを向いた。

「どうぞそうおっしゃらずに」長十郎はまた忠利の足を戴いた。

「いかんいかん」顔をそむけたままで言った。

列座の者の中から、「弱輩の身をもつて推参じや、控えたらよかろう」と言つたものがある。長十郎は当年十七歳である。

「どうぞ」咽のどにつかえたような声で言つて、長十郎は三度目に戴いた足をいつまでも額に当てて放さずにいた。

「情こわの剛やつい奴やつじやな」声はおこつて叱しかるようであつたが、忠利はこの詞ことばとともに二度うなずいた。

長十郎は「はつ」と言つて、両手で忠利の足を抱かかえたまま、床うしろの背後うつぶに俯伏して、しばらく動かずにいた。そのとき長十郎の心のうちには、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたような、力の弛ゆるみと心の落着きとが満ちあふれて、そのほかのことは何も意識に上らず、備後びんご置たみの上に涙のこぼれるのも知らなかつた。

長十郎はまだ弱輩で何一つきわだつた功績もなかつたが、忠利は始終目をかけて側近そばちかく使つていた。酒が好きで、別人なら無礼のお咎とがめもありそんな失しつ錯さくをしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのではない、酒がしたのじや」と言つて笑つていた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過あやまちを償つぐわなくてはならぬと思ひ込んでいた長十郎は、忠利の病氣おもが重つてからは、その報謝と賠償との道は殉死のほかないとかたく信

ずるようになった。しかし細かにこの男の心中に立ち入ってみると、自分の発意で殉死しなくてはならぬという心持ちのかたわら、人が自分を殉死するはずのものだと思っているに違いないから、自分は殉死を余儀なくせられていると、人にすがって死の方向へ進んでいくような心持ちが、ほとんど同じ強さに存在していた。反面から言うとも、もし自分が殉死せずにいたら、恐ろしい屈辱を受けるに違いないと心配していたのである。こういう弱みのある長十郎ではあるが、死を怖れる念は微塵もない。それだからどうぞ殿様に殉死を許して戴こうという願望は、何物の障礙をもこうむらずにこの男の意志の全幅を領していたのである。

しばらくして長十郎は両手で持つている殿様の足に力がいって少し踏み伸ばされるように感じた。これはまただるくおなりになったのだと思ったので、また最初のようにしずかにさすり始めた。このとき長十郎の心頭には老母と妻とのことが浮かんだ。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けるということを考えて、それで己は家族を安穩な地位において、安んじて死ぬることが出来ると思つた。それと同時に長十郎の顔は晴れ晴れした気色になった。

四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、はじめて殉死のことを明かして暇いとまご乞こいをした。母は少しも驚かなかつた。それは互いに口に出しては言わぬが、きようは倅せがれが切腹する日だと、母もとうから思っていたからである。もし切腹しないと言っても言つたら、母はさぞ驚いたことであろう。

母はまだもらつたばかりのよめが勝手にいたのをその席へ呼んでただ支度が出来たかと問うた。よめはすぐに起たつて、勝手からかねて用意してあつた杯盤を自身に運んで出た。

よめも母と同じように、夫がきよう切腹するということをとうから知つていた。髪を綺麗きれいに撫なでつけて、よい分のふだん着に着換えている。母もよめも改まった、真面目まじめな顔をしているのは同じことであるが、ただよめの目の縁ふちが赤くなっているのです、勝手にいたとき泣いたことがわかる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

四人は黙つて杯を取り交わした。杯が一順したとき母が言った。

「長十郎や。お前の好きな酒じや。少し過してはどうじやな」

「ほんにそうでござりまするな」と言つて、長十郎は微笑を含んで、心地こころよげに杯を重ねた。

しばらくして長十郎が母に言った。「よい心持ちに酔いました。先日からかれこれと心

づかいをいたしましたせいか、いつもより酒が利いたようでござります。ご免をこうむつてちよつと一休みいたしましたしょう」

こう言つて長十郎は起つて居間にはいったが、すぐに部屋の本真中に転がつて、軒をかきだした。女房があとからそつとはいはいつて枕を出して当てさせたとき、長十郎は「ううん」となつて寝返りをしただけで、また軒をかき続けている。女房はじつと夫の顔を見ていたが、たちまちあわてたように起つて部屋へ往つた。泣いてはならぬと思つたのである。

家はひっそりとしている。ちやうど主人の決心を母と妻とが言わずに知つていたように、家来も女中も知つていたので、勝手からも厩の方からも笑い声なぞは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、じつと物を思つている。主人は居間で軒をかいて寝ている。あけ放つてある居間の窓には、下に風鈴をつけた吊惹が吊つてある。その風鈴が折り折り思い出したようにかすかに鳴る。その下には丈の高い石の頂を掘りくぼめた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一疋止まつて、羽を山形に垂れて動かずにいる。

一時立つ。もう午を過ぎた。食事の支度は女中に言いつけてあるが、姑が食べると言われるか、どうだかわからぬと思つて、よめは聞きに行こうと思ひながらた

めらつていた。もし自分だけが食事のことなどを思うように取られはすまいかとためらつていたのである。

そのときかねて 介かいしやく 錯さくを頼まれていた関小平次が来た。姑はよめを呼んだ。よめが黙つて手をついて機嫌を伺つてしていると、姑が言った。

「長十郎はちよつと一休みすると言うたが、いかい時が立つような。ちようど関殿も来られた。もう起こしてやつてはどうじやろうの」

「ほんにそうでござります。あまり遅くなりません方が」よめはこう言つて、すぐに起たつて夫を起しに往つた。

夫の居間に来た女房は、さきに枕をさせたときと同じように、またじつと夫の顔を見ていた。死なせに起すのだと思うので、しばらくは詞ことばをかけかねていたのである。

熟睡していても、庭からさす昼の明りがまばゆかったと見えて、夫は窓の方を背にして、顔をこつちへ向けている。

「もし、あなた」と女房は呼んだ。

長十郎は目をさまさない。

女房がすり寄つて、そびえている肩に手をかけると、長十郎は「あ、ああ」と言つて臂ひじ

を伸ばして、両眼を開いて、むっくり起きた。

「たいそうよくお休みになりました。お袋さまがあまり遅くなりにはせぬかとおっしゃりますから、お起し申しました。それに関様がおいでになりました」

「そうか。それでは午ひるになつたと見える。少しの間だと思つたが、酔つたのと疲れがあつたのとで、時の立つのを知らずにいた。その代りひどく気分がよくなつた。茶漬ちやつけでも食べて、そろそろ東光院へ往かざばなるまい。お母かあさまにも申し上げてくれ」

武士はいざというときには飽ほう食しょくはしない。しかしまた空腹で大切なことに取りかかるともない。長十郎は実際ちよつと寝ようと思つたのだが、覚えぬ気持よく寝過し、午ひるになつたと聞いたので、食事をしようと云つたのである。これから形かたばかりではあるが、一家四人のものがふだんのように膳ぜんに向かつて、午の食事をした。

長十郎は心静かに支度をして、関を連れて菩提ぼだい所じよ東光院へ腹を切りに往つた。

長十郎が忠利の足を戴いて願つたように、平生恩顧を受けていた家臣のうちで、これと前後して思い思いに殉死の願ひをして許されたものが、長十郎を加えて十八人あつた。いづれも忠利の深く信頼していた侍どもである。だから忠利の心では、この人々を子息みっひ光

尚さの保護のために残しておきたいことは山々であった。またこの人々を自分と一しよに死なせるのが残ざん刻こくだとは十分感じていた。しかし彼ら一人一人に「許す」という一言を、身を割さくように思いながら与えたのは、勢いやむことを得なかつたのである。

自分の親しく使っていた彼らが、命を惜しまぬものであるとは、忠利は信じている。したがって殉死を苦痛とせぬことも知っている。これに反してもし自分が殉死を許さずにおいて、彼らが生きながらえていたら、どうであろうか。家かちゆう中ちゆう一同は彼らを死ぬべきときに死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者ひきようものとしてともに齒よわいせぬであろう。それだけならば、彼らもあるいは忍んで命を光尚に捧げるときの来るのを待つかも知れない。しかしその恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使っていたのだと言うものがあつたら、それは彼らの忍び得ぬことであろう。彼らはどんなにか口惜しい思いをするであろう。こう思ってみると、忠利は「許す」と言わずにはいられない。そこで病苦にも増したせつない思いをしながら、忠利は「許す」と言つたのである。

殉死を許した家臣の数が十八人になつたとき、五十余年の久しい間治乱のうちに身を処して、人情世故せいこにあくまで通じていた忠利は病苦の中にも、つくづく自分の死と十八人の侍の死とについて考えた。生しやうあるものは必ず滅する。老木の朽ち枯れるそばで、若木は茂

り栄えて行く。嫡子ちやくし光尚の周囲にいる少壮者わかものどもから見れば、自分の任用している老成とし人よりらは、もういなくてよいのである。邪魔にもなるのである。自分は彼らを生きながらえさせて、自分にしたと同じ奉公を光尚にさせたいと思うが、その奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来ていて、手ぐすね引いて待つているかも知れない。自分の任用したものは、年来それぞれの職分を尽くして来るうちに、人の怨みうらをも買っていていよう。少くも媚嫉そねみの的になつてゐるには違いない。そうしてみれば、強しいて彼らにながらえていゝというものは、通達した考えではないかも知れない。殉死を許してやったのは慈悲であつたかも知れない。こう思つて忠利は多少の慰藉いしやを得たような心持ちになつた。

殉死を願つて許された十八人は寺本八左衛門直次なおつぐ、大塚喜兵衛種次たねつぐ、内藤長十郎元もととつぐ、続つぐ、太田小十郎正信、原田十次郎之直ゆきななお、宗像加兵衛景定むなかた、同吉太夫景好きちだゆう、橋谷市蔵重次しげつぐ、井原十三郎吉正よしまさ、田中意徳、本庄喜助重正しげまさ、伊藤太左衛門方高まさたか、右田因幡統安いなばむねやす、野田喜兵衛重綱しげつな、津崎五助長季ながすえ、小林理右衛門行秀ゆきひで、林与左衛門正定まさただ、宮永勝左衛門宗佑むねすけの人々である。

寺本が先祖は尾張国寺本に住んでいた寺本太郎というものであつた。太郎の子ないぜん内

膳正うしやうは今川家に仕えた。内膳正の子が左兵衛、左兵衛の子が右衛門佐うえもんすけ、右衛門佐の子が与左衛門で、与左衛門は朝鮮征伐のとき、加藤嘉明よしあきに属して功があった。与左衛門の子が八左衛門で、大阪籠城ろうじょうのとき、後藤基次もとつぐの下で働いたことがある。細川家に召し抱えられてから、千石取つて、鉄砲五十挺の頭ちようかしらになっていた。四月二十九日に安養寺で切腹した。五十三歳である。藤本猪左衛門いざえもんが介錯かいしやくした。大塚は百五十石取りの横目役よこめである。四月二十六日に切腹した。介錯は池田八左衛門であった。内藤がことは前に言った。太田は祖父伝左衛門が加藤清正に仕えていた。忠広ちゆうかうが封を除かれたとき、伝左衛門とその子の源左衛門とが流浪るろうした。小十郎は源左衛門の二男で、児小姓こしやうに召し出された者である。百五十石取つていた。殉死せんとうの先登せんとうはこの人で、三月十七日に春日寺で切腹した。十八歳である。介錯は門司源兵衛もじがした。原田は百五十石取りで、お側に勤めていた。四月二十六日に切腹した。介錯は鎌田源太夫かまたがした。宗像加兵衛、同吉太夫きちだゆうの兄弟は、宗像中納言氏うじさだ貞さだの後裔こうえいで、親清兵衛景延かげのぶの代に召し出された。兄弟いずれも二百石取りである。五月二日に兄は流長院、弟は蓮政寺で切腹した。兄の介錯は高田十兵衛、弟のは村上市右衛門がした。橋谷は出雲国いずものくにの人で、尼子あまこの末流はつりゆうである。十四歳のとき忠利に召し出されて、知行百石の側役そばやくを勤め、食事の毒味どくみをしていた。忠利は

病が重くなつてから、橋谷の膝ひざを枕にして寝たこともある。四月二十六日に西岸寺で切腹した。ちようど腹を切ろうとすると、城の太鼓がかすかに聞えた。橋谷はついて来ていた家隸けらいに、外へ出て何時なんじか聞いて来いと言つた。家隸は歸つて、「しまいの四つだけは聞きました、外へ出て何時なんじか聞いて来いと言つた。家隸は歸つて、「しまいの四つだけは聞きました、総体の俘ぼち数はわかりません」と言つた。橋谷をはじめとして、一座の者が微笑ほほえんだ。橋谷は「最期さいごによう笑わせてくれた」と言つて、家隸に羽織を取らせて切腹した。吉村甚太夫じんたゆうが介錯した。井原は切米きりまい三人扶持ふち十石を取つていた。切腹したとき阿部弥一やいちえもん右衛門の家隸林左兵衛が介錯した。田中は阿菊おきくもの物語を世に残したお菊が孫で、忠利が愛宕山あたごさんへ学問に往つたときの幼な友達であつた。忠利がそのころ出家しようとしたのを、ひそかに諫いさめたことがある。のちに知行二百石の側役を勤め、算術が達者で用に立つた。老年になつてからは、君前で頭巾ずきんをかむつたまま安座することを免ゆるされていた。当代に追腹おいばらを願つても許されぬので、六月十九日に小脇差こわきさしを腹に突き立ててから願書を出して、とうとう許された。加藤安太夫が介錯した。本庄は丹後国たんごのくにの者で、流浪していたのを三齋公の部屋付き本庄久右衛門ほんじょうきゆうえもんが召使つていた。仲津で狼藉者ろうぜきものを取り押さえて、五人扶持十五石の切米きりまい取りにせられた。本庄を名のつたのもそのときからである。四月二十六日に切腹した。伊藤は奥納戸おくおなんどやく役を勤めた切米取りである。四月二十六日に

切腹した。介錯は河喜多八助がした。右田は大伴家の浪人で、忠利に知行百石で召し抱えられた。四月二十七日に自宅で切腹した。六十四歳である。松野右京の家隸田原勘兵衛が介錯した。野田は天草の家老野田美濃の倅で、切米取りに召し出された。四月二十六日に源覚寺で切腹した。介錯は恵良半衛門がした。津崎のことは別に書く。小林は二人扶持十石の切米取りである。切腹のとき、高野勘右衛門が介錯した。林は南郷下田村の百姓であつたのを、忠利が十人扶持十五石に召し出して、花畑の館の庭方にした。四月二十六日に仏巖寺で切腹した。介錯は仲光半助がした。宮永は二人扶持十石の台所役人で、先代に殉死を願つた最初の男であつた。四月二十六日に浄照寺で切腹した。介錯は吉村嘉右衛門がした。この人々の中にはそれぞれの家の菩提所に葬られたものもあるが、また高麗門外の山中にある霊屋のそばに葬られたものもある。

切米取りの殉死者はわりに多人数であつたが、中にも津崎五助の事蹟は、きわだつて面白いから別に書くことにする。

五助は二人扶持六石の切米取りで、忠利の犬牽きである。いつも鷹狩の供をして野方で忠利の気に入っていた。主君にねだるようにして、殉死のお許しは受けたが、家老たちは皆言つた。「ほかの方々は高禄を賜わつて、栄耀をしたのに、そちは殿様のお犬牽きで

はないか。そちが志は殊勝で、殿様のお許しが出たのは、この上もない誉れじや。もうそれでよい。どうぞ死ぬることだけは思い止まって、御当主にご奉公してくれい」と言った。五助はどうしても聴かずに、五月七日にいつも牽いてお供をした犬を連れて、追廻田畑の高琳寺へ出かけた。女房は戸口まで見送りに出て、「お前も男じや、お歴々の衆に負けぬようにおしなされい」と言った。

津崎の家では往生院を菩提所にしていたが、往生院は上のご由緒のあるお寺だといふのではばかつて、高琳寺を死所ときめたのである。五助が墓地にはいつてみると、かねて介錯を頼んでおいた松野縫殿助が先に来て待つていた。五助は肩にかけた浅葱の囊をおろしてその中から飯行李を出した。蓋をあけると握り飯が二つはいつていふ。それを犬の前に置いた。犬はすぐに食おうともせず、尾をふつて五助の顔を見ていた。五助は人間に言うように犬に言った。

「おぬしは畜生じやから、知らずにおるかも知れぬが、おぬしの頭をさすつて下されたことのある殿様は、もうお亡くなり遊ばされた。それでご恩になつていなされたお歴々は皆きよう腹を切つてお供をなさる。おれは下司ではあるが、御扶持を戴いてつないだ命はお歴々と変つたことはない。殿様にかわいがつて戴いたありがたさも同じことじや。それで

おれは今腹を切つて死ぬるのじや。おれが死んでしもうたら、おぬしは今から野ら犬になるのじや。おれはそれがかわいそうでならん。殿様のお供をした鷹は岫雲院しゅううんいんで井戸に飛び込んで死んだ。どうじや。おぬしもおれと一しよに死のうとは思わんかい。もし野ら犬になつても、生きていたいと思うたら、この握り飯を食つてくれい。死にたいと思うなら、食うなよ」

こう言つて犬の顔を見ていたが、犬は五助の顔ばかりを見ていて、握り飯を食おうとはしない。

「それならおぬしも死ぬるか」と言つて、五助は犬をきつと見つめた。

犬は一声鳴いて尾をふつた。

「よい。そんなら不便ふびんじゃが死んでくれい」こう言つて五助は犬を抱き寄せて、脇差を抜いて、一刀に刺した。

五助は犬の死骸をかたわらへ置いた。そして懷中から一枚の書き物を出して、それを前にひろげて、小石を重りにして置いた。誰やしきやらの邸で歌の会のあつたとき見覚えた通りに半紙を横に二つに折つて、「家老衆はとまれとまれと仰せあれどとめてとまらぬこの五助かな」と、常の詠草のように書いてある。署名はしてない。歌の中に五助としてあるから、

二重に名を書かなくてもよいと、すなおに考えたのが、自然に故実になつていた。

もうこれで何も手落ちはないと思つた五助は「松野様、お頼み申します」と言つて、安座んざして肌はだをくつろげた。そして犬の血のついたままの脇差さかてを持つて、「お鷹たかじょうし匠じやう衆ゆうはどうなさりましたな、お犬牽いぬひきは只今ただいま参りますぞ」と高声たかこゑに言つて、一声快こころよげに笑つて、腹を十文字に切つた。松野が背後うしろから首を打つた。

五助は身分の軽いものではあるが、のちに殉死者の遺族の受けたほどの手当は、あとに残つた後家が受けた。男子一人は小さいとき出家していたからである。後家は五人扶持をもらい、新たに家屋敷をもらつて、忠利の三十三回忌のときまで存命していた。五助の甥の子が二代の五助となつて、それからは代々触ふれぐみ組で奉公していた。

忠利の許しを得て殉死した十八人のほかに、阿部弥一右衛門通みちのぶ信のぶというものがあつた。初めは明石あかしうじ氏じで、幼名を猪之助いのすけといつた。はやくから忠利の側そば近く仕えて、千百石余の身分になつてゐる。島原征伐のとき、子供五人のうち三人まで軍功によつて新知二百石あづつをもらつた。この弥一右衛門は家中でも殉死するはずのように思い、当人もまた忠利の夜枷よしぎに出る順番が来るたびに、殉死したいと言つて願つた。しかしどうしても忠利は許

さない。「そちが志は満足に思うが、それよりは生きていてみつひき光尚に奉公してくれい」と、何度願つても、同じことを繰り返して言うのである。

一体忠利は弥一右衛門の言うことを聴かぬ癖がついている。これはよほど古くからのことで、まだ猪之助といつて小姓を勤めていたころも、猪之助が「ご膳ぜんを差し上げましょうか」と伺うと、「まだ空腹にはならぬ」と言う。ほかの小姓が申し上げると、「よい、出させい」と言う。忠利はこの男の顔を見ると、反対したくなるのである。そんなら叱られるかという、そうでもない。この男ほど精勤をするものはなく、万事に気がついて、手ぬかりがないから、叱ろうといつても叱りようがない。

弥一右衛門はほかの人の言いつけられてすることを、言いつけられずにする。ほかの人の申し上げてすることを申し上げずにする。しかしすることはいつも肯綮こうけいにあたっていて、間然すべきところがない。弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くようになってい。忠利は初めなんとも思わずに、ただこの男の顔を見ると、反対したくなったのだが、のちにはこの男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。憎いと思ひながら、聡明そうめいな忠利はなぜ弥一右衛門がそうなつたかと回想してみ、それは自分がしむけたのだということに気がついた。そして自分の反対する癖を改めようと思つていながら、月がかさなり年がか

さなるにしたがつて、それが次第に改めにくくなつた。

人には誰たが上にも好きな人、いやな人というものがある。そしてなぜ好きだか、いやだかと穿せん鑿さくしてみると、どうかすると捕ほ捉とくするほどの抛よりどころがない。忠利が弥一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。しかし弥一右衛門という男はどこかに人と親しみたいところを持つてゐるに違ちがひない。それは親しい友達の少いのでわかる。誰でも立派な侍として尊敬はする。しかしたやすく近づこうと試みるものがない。まれに物ずきに近づこうと試みるものがあつても、しばらくするうちに根気が続かなくなつて遠ざかつてしまふ。まだ猪之助といつて、前髪まへかみのあつたとき、たびたび話をしかけたり、何かに手を借かしてやつたりしていた年上の男が、「どうも阿部にはつけ入る隙ひまがない」と言つて我がを折つた。そこらを考えてみると、忠利が自分の癖を改めたく思いながら改めることの出来なかつたのも怪しむに足りない。

とにかく弥一右衛門は何度願つても殉死の許しを得ないでゐるうちに、忠利は亡くなつた。亡くなる少し前に、「弥一右衛門奴めはお願いと申すことを申したことはござりません、これが生しょう涯が唯い一ごつのお願いでござります」と言つて、じつと忠利の顔を見ていたが、忠利もじつと顔を見返して、「いや、どうぞ光尚に奉公してくれい」と言い放つた。

弥一右衛門はつくづく考えて決心した。自分の身分で、この場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合わせているということは、百人が百人所詮出来ぬことと思うだろう。犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかのほか、しかたがあるまい。だがおれはおれだ。よいわ。武士は妾とは違う。主の氣に入らぬからといって、立場がなくなるはずはない。こう思つて一日一日と例のごとくに勤めていた。

そのうちに五月六日が来て、十八人のものが皆殉死した。熊本中ただその噂ばかりである。誰はなんと言つて死んだ、誰の死にようが誰よりも見事であつたという話のほかには、なんの話もない。弥一右衛門は以前から人に用事のほかの話をしかけられたことは少かつたが、五月七日からこつちは、御殿の詰所に出ていてみても、一層寂しい。それに相役が自分の顔を見ぬようにして見るのがわかる。そつと横から見たり、背後から見たりするのがわかる。不快でたまらない。それでもおれは命が惜しくて生きているのではない、おれをどれほど悪く思う人でも、命を惜しむ男だとはまさかに言うことが出来まい、たつた今でも死んでよいのなら死んでみせると思うので、昂然と項をそらして詰所へ出て、昂然と項をそらして詰所から引いていた。

二三日立つと、弥一右衛門が耳にけしからん噂が聞え出して来た。誰が言い出したこと

か知らぬが、「阿部はお許しのないを幸いに生きてみるとみえる、お許しはのうても追腹は切られぬはずがない、阿部の腹の皮は人とは違うとみえる、瓢箪ひょうたんに油でも塗って切ればよいに」というのである。弥一右衛門は聞いて思いのほかのことに思った。悪口が言いたくばなんとも言うがよい。しかしこの弥一右衛門をたて堅から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言えば言われたものかな、よいわ。そんならこの腹の皮を瓢箪に油を塗って切って見しよう。

弥一右衛門はその日詰所を引くと、急使をもつて別家している弟二人を山崎の邸に呼び寄せた。居間と客間との間の建具をはずさせ、嫡子ごんべえ権兵衛、二男やごべえ弥五兵衛、つぎにまだ前髪のある五男しちのじよう七之丞の三人をそばにおらせて、主人は威儀を正して待ち受けている。権兵衛は幼名権十郎といって、島原征伐に立派な働きをして、新知二百石をもらっている。父に劣らぬ若者である。このたびのことについては、ただ一度父に「お許しは出ませなんだか」と問うた。父は「うん、出んぞ」と言った。そのほか二人の間にはなんの詞ことばも交わされなかった。親子は心の底まで知り抜いているので、何も言うにはおよばぬのであった。まもなく二張ふたはりの提燈ちようちんが門のうちにはいった。三男いちだゆう市太夫、四男ごだゆう五太夫の二人がほとんど同時に玄関に来て、雨具を脱いで座敷に通った。中陰の翌日からじめじめとした

雨になつて、五月闇さつきやみの空が晴れずにいるのである。

障子はあけ放してあつても、蒸し暑くて風がない。そのくせ燭しょくだい台の火はゆらめいている。螢ほたるが一匹庭の木立ちを縫つて通り過ぎた。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼びにやったのに、皆よう来てくれた。家か中ちゆう一般の噂じやというから、おぬしたちも聞いたに違いない。この弥一右衛門が腹は瓢箪に油を塗つて切る腹じやそうな。それじやによつて、おれは今瓢箪に油を塗つて切ろうと思う。どうぞ皆で見届けてくれい」

市太夫も五太夫も島原の軍功で新知二百石をもらつて別家しているが、中にも市太夫は早くから若殿附きになつていたので、御代替りになつて人に羨うらやまれる一人である。市太夫が膝ひざを進めた。「なるほど。ようわかりました。実は傍ほうばい輩ばいが言うには、弥一右衛門殿は御先代の御遺言で続いて御奉公なさるそうな。親子兄弟相変らず揃そろうてお勤めなさる、めでたいことじやと言うのでござります。その詞ことばが何か意味ありげで齒そとがゆうござりました」

父弥一右衛門は笑つた。「そうであろう。目の先ばかり見える近眼ちかめどもを相手にするな。そこでその死なぬはずのおれが死んだら、お許しのなかつたおれの子じやというて、おぬしたちを侮あなどるものもあろう。おれの子に生まれたのは運じや。しようちことがない。恥を受

けるときは一しよに受けい。兄弟喧嘩げんかをするなよ。さあ、瓢箪で腹を切るのをよう見ておけ」

こう言つておいて、弥一右衛門は子供らの面前で切腹して、自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測りかねていた五人の子供らは、このとき悲しくはあつたが、それと同時にこれまでの不安心な境きょうがい界を一步離れて、重荷の一つをおろしたように感じた。

「兄あにき」と二男弥五兵衛が嫡子に言つた。「兄弟喧嘩をするなど、お父とっさんは言いおいた。それには誰も異存はあるまい。おれは島原で持場が悪うて、知行ももらわずにいるから、これからはおぬしが厄やっかい介になるじやろう。じやが何事があつても、おぬしが手にたしかな槍やり一本はあるというものじや。そう思うていてくれい」

「知れたことじや。どうなることか知れぬが、おれがもらう知行はおぬしがもらうも同じじや」こう言つたぎり権兵衛は腕組みをして顔をしかめた。

「そうじや。どうなることか知れぬ。追腹はお許しの出た殉死とは違うなぞという奴やつがあらうて」こう言つたのは四男の五太夫である。

「それは目に見えておる。どういう目に逢おうても」こう言いさして三男市太夫は権兵衛の

顔を見た。「どういふ目に逢うても、兄弟離れ離れに相手にならずに、固まって行こうぞ」
「うん」と権兵衛は言ったが、打ち解けた様子もない。権兵衛は弟どもを心にいたわつてはいるが、やさしく物をいわれぬ男である。それに何事も一人で考えて、一人でしたがる。相談というものをめつたにしない。それで弥五兵衛も市太夫も念を押ししたのである。

「兄にいさま方が揃うておいでなさるから、お父さんの悪口は、うかと言われますまい」
これは前髪の七之丞が口から出た。女のような声ではあったが、それに強い信念が籠こもつていたので、一座のもの胸を、暗黒な前途を照らす光明のように照らした。

「どりや。おつ母さんに言うて、女子おんなたちに暇いとま乞こいをさしようか」こう言つて権兵衛が席を起つた。

従四位下侍従兼肥後守光尚の家督相続が済んだ。家臣にはそれぞれ新知、加増、役替やくがえなどがあつた。中にも殉死の侍十八人の家々は、嫡子にそのまま父のあとを継がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその数には漏もれない。未亡人びぼうじん、老父母には扶持じつこんが与えられる。家屋敷を拝領して、作事までも上かみからしむけられる。先代が格別入懇じつこんにせられた家柄で、死天しでの旅のお供にさえ立つたのだから、家中のものが羨うらやみはしても妬ねたみはし

ない。

しかるに一種変つた跡目あとめの処分を受けたのは、阿部弥一右衛門の遺族である。嫡子権兵衛は父の跡をそのまま継ぐことが出来ずに、弥一右衛門が千五百石の知行は細かに割さいて弟たちへも配分せられた。一族の知行を合わせてみれば、前に變つたことはないが、本家を継いだ権兵衛は、小身ものになつたのである。権兵衛の肩幅のせまくなつたことは言うまでもない。弟どもも一人一人の知行は殖ふえながら、これまで千石以上の本家によつて、大木の陰に立つているように思つていたのが、今は橡どんぐり栗の背せい競べになつて、ありがたいうで迷惑な思いをした。

政道は地道じみちである限りは、咎とがめの歸するところを問うものはない。一いったん旦たん常じょうに變つた処置がある、誰の捌さばきかという詮議せんぎが起る。当主のお覚えめでたく、お側そば去らずに勤めてゐる大目附役に、林外記というものがある。小才覚があるので、若殿様時代のお伽ときには相應していたが、物の大体を見ることにおいてはおよばぬところがあつて、とかく苛察かさつに傾きたがる男であつた。阿部弥一右衛門は故殿様のお許しを得ずに死んだのだから、眞の殉死者と弥一右衛門との間には境界をつけなくてはならぬと考えた。そこで阿部家の俸禄ほうろく分割の策を献じた。光尚も思慮ある大名ではあつたが、まだ物馴れぬものなときのことで、弥一

右衛門や嫡子権兵衛と懇意でないために、思いやりがなく、自分の手元に使つて馴染みのある市太夫がために加増になるというところに目をつけて、外記の言を用いたのである。

十八人の侍が殉死したときには、弥一右衛門はお側に奉公していたのに殉死しないと言つて、家中のものが卑しんだ。さてわずかに二三日を隔てて弥一右衛門は立派に切腹したが、事の当否は措いて、一旦受けた侮辱は容易に消えがたく、誰も弥一右衛門を褒めるものがない。上では弥一右衛門の遺骸を霊屋のかたわらに葬ることを許したのであるから、跡目相続の上にも強いて境界を立てずにおいて、殉死者一同と同じ扱いをしてよかつたのである。そうしたなら阿部一族は面目を施して、こぞつて忠勤を励んだのであろう。しかるに上で一段下がつた扱いをしたので、家中のものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形になつた。権兵衛兄弟は次第に傍輩にうとんぜられて、怏々として日を送つた。

寛永十九年三月十七日になつた。先代の殿様の一週忌である。霊屋のそばにはまだ妙解寺は出来ていぬが、向陽院という堂宇が立つて、そこに妙解院殿の位牌が安置せられ、鏡首座という僧が住持している。忌日にさきだつて、紫野大徳寺の天祐和尚が京都から下向する。年忌の営みは晴れ晴れしいものになるらしく、一箇月ばかり前から、熊本

の城下は準備に忙しかつた。

いよいよ当日になった。うららかな日和ひよりで、霊屋のそばは桜の盛りである。向陽院の周囲には幕を引き廻わして、歩卒が警護している。当主がみずから臨場して、まず先代の位牌に焼香し、ついで殉死者十九人の位牌に焼香する。それから殉死者遺族が許されて焼香する、同時に御紋附上下かみしも、同時服じふくを拝領する。馬廻うままわり以上は長上下なががみしも、徒士かちは半上はんがみしも下である。下々の者は御香奠ごこうでんを拝領する。

儀式はとどこおりなく済んだが、その間にただ一つの珍事が出来しゅつたした。それは阿部権兵衛が殉死者遺族の一人として、席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだとき、焼香をして退のきしなに、脇差の小柄こづかを抜き取つて髻もとどりを押し切つて、位牌の前に供えたことである。この場に詰めていた侍どもも、不意の出来事に驚きあきれて、茫然ぼうぜんとして見ていたが、権兵衛が何事もないように、自若じじやくとして五六歩退いたとき、一人の侍がようよう我に返つて、「阿部殿、お待ちなさい」と呼びかけながら、追いつがって押し止めた。続いて二三人立ちかかつて、権兵衛を別間に連れてはいった。

権兵衛が詰衆つめしゆうに尋ねられて答えたところはこうである。貴殿らはそれがしを乱心者かきんのように思われるであろうが、全くさようなわけではない。父弥一右衛門は一生瑕瑾かきんのない御奉公をいたしたればこそ、故殿様のお許しを得ずに切腹しても、殉死者の列に加えら

れ、遺族たるそれがしさえ他人にさきだつて御位牌に御焼香いたすことが出来たのである。しかしそれがしは不肖にして父同様の御奉公がなりがたいのを、上かみにもご承知と見えて、知行を割さいて弟どもにおつかわしなされた。それがしは故殿様にも御当主にも亡き父にも一族の者どもにも傍ほう輩ばいにも面目がない。かように存じているうち、今日御位牌に御焼香いたす場合になり、とつさの間、感慨胸に迫り、いつそのこと武士を棄てようと決心いたしました。お場所柄がらを顧みざるお咎とがめは甘んじて受ける。乱心などはいたさぬというのである。

権兵衛の答を光尚は聞いて、不快に思った。第一に権兵衛が自分に面当つらあてがましい所しよぎ行ようをしたのが不快である。つぎに自分が外記の策を納いれて、しなくてもよいことをしたのが不快である。まだ二十四歳の血気の殿様で、情を抑え欲を制することが足りない。恩をもつて怨うらみに報うらむる寛大の心持ちに乏しい。即座に権兵衛をおし籠こめさせた。それを聞いた弥五兵衛以下一族のものは門を閉じて上の御沙汰ごさたを待つことにして、夜陰に一同寄り合つては、ひそかに一族の前途のために評議を凝こらした。

阿部一族は評議の末、このたび先代一週忌の法会ほうえのために下向して、まだ逗とまり留りゆうしている天祐和尚にすぎることにした。市太夫は和尚の旅館に往つて一部始終を話して、権兵衛に対する上の処置を軽減してもらおうように頼んだ。和尚はつくづく聞いて言った。承れ

ば御一家のお成行きなりゆきの毒千万である。しかし上の御政道に対してかれこれ言うことは出来ない。ただ権兵衛殿に死を賜わるとなつたら、きつと御助命を願つて進ぜよう。ことに権兵衛殿はすでに髻もとどりを払われてみれば、桑門そうもん同様の身の上である。御助命だけはいかようにも申してみようと言つた。市太夫は頼もしく思つて歸つた。一族のものは市太夫の復命を聞いて、一条の活路を得たような気がした。そのうち日が立つて、天祐和尚の帰京のときが次第に近づいて来た。和尚は殿様に逢つて話をするたびに、阿部権兵衛が助命のことを折りがあつたら言上しようと思つたが、どうしても折りが無い。それはそのはずである。光尚はこう思つたのである。天祐和尚の逗留中に権兵衛のことを沙汰したらきつと助命を請われるに違いない。大寺の和尚の詞ことばでみれば、等閑なおよりに聞きすてることはなるまい。和尚の立つのを待つて処置しようと思つたのである。とうとう和尚は空しく熊本を立てしまつた。

天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部権兵衛を井出の口に引き出だして縛しばり首くびにさせた。先代の御位牌に対して不敬なことをあえてした、上かみを恐れぬ所行として処置せられたのである。

弥五兵衛以下一同のものは寄り集まつて評議した。権兵衛の所行は不埒には違いない。しかし亡父弥一右衛門はとにかく殉死者のうちに数えられている。その相続人たる権兵衛でみれば、死を賜うことは是非がない。武士らしく切腹仰せつけられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盗かなんぞのように、白昼に縛首にせられた。この様子で推すれば、一族のものも安穩には差しおかれまい。たとい別に御沙汰がないにしても、縛首にせられたもの一族が、何の面目あつて、傍輩に立ち交わつて御奉公をしよう。この上は是非におよばない。何事があるうとも、兄弟わかれわかれになるなど、弥一右衛門殿の言いおかれたいのはこのときのことである。一族討手を引き受けて、ともに死ぬるほかはないと、一人の異議を称えるものもなく決した。

阿部一族は妻子を引きまとめて、権兵衛が山崎の屋敷に立て籠つた。

おだやかならぬ一族の様子が上に聞えた。横目が偵察に出て来た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖して静まりかえつていた。市太夫や五太夫の宅は空屋になつていた。

討手の手配りが定められた。表門は側者頭、竹内数馬長政が指揮役をして、それに小頭添島九兵衛、同じく野村庄兵衛がしたがっている。数馬は千百五十石で鉄砲組三十挺の頭である。譜第の乙名島徳右衛門が供をする。添島、野村は当時百石のものであ

る。裏門の指揮役は知行五百石の側者頭高見権右衛門重政しげまさで、これも鉄砲組三十挺の頭である。それに目附畑十太夫と竹内数馬の小頭で当時百石の千場ちば作兵衛とがしたがっている。

討手は四月二十一日に差し向けられることになった。前晩に山崎の屋敷の周囲には夜廻りがつけられた。夜がふけてから侍分のものが一人覆面して、堀へをうちから乗り越えて出たが、廻役さぶりの佐分利嘉左衛門が組の足軽丸山三之丞さんのじようが討ち取った。そののち夜明けまで何事もなかった。

かねて近隣のものには沙汰があつた。たとい当番たりとも在宿して火の用心を怠らぬようにいたせというのが一つ。討手でないのに、阿部が屋敷に入り込んで手出しをすることは厳禁であるが、落人おちうどは勝手に討ち取れというのが二つであつた。

阿部一族は討手の向う日をその前日に聞き知つて、まず邸内を隈なく掃除し、見苦しい物はことごとく焼きすてた。それから老若ろうにやく打ち寄つて酒宴をした。それから老人や女は自殺し、幼いもののはてんでに刺し殺した。それから庭に大きい穴を掘つて死骸しがいを埋めた。あとに残つたのは究くつき竟ぎようの若者ばかりである。弥五兵衛、市太夫、五太夫、七之丞の四人が指図して、障子襖ふすまを取り払つた広間に家来を集めて、鉦太鼓かねたいこを鳴らさせ、高声に念

仏をさせて夜の明けるのを待った。これは老人や妻子を弔うためだとは言ったが、実は下人どもに臆病の念を起させぬ用心であった。

阿部一族の立て籠った山崎の屋敷は、のちに齋藤勘助の住んだ所で、向いは山中又左衛門、左右両隣は柄本又七郎、平山三郎の住いであった。

このうちで柄本が家は、もと天草郡を三分して領していた柄本、天草、志岐の三家の一つである。小西行長が肥後半国を治めていたとき、天草、志岐は罪を犯して誅せられ、柄本だけが残っていて、細川家に仕えた。

又七郎は平生阿部弥一右衛門が一家と心安くして、主人同志はもとより、妻女までも互いに往来していた。中にも弥一右衛門の二男弥五兵衛は鎗が得意で、又七郎も同じ技を嗜むところから、親しい中で広言をし合って、「お手前が上手でもそれがしにはかなうまい」、「いやそれがしがなんでお手前に負けよう」などと言っていた。

そこで先代の殿様の病中に、弥一右衛門が殉死を願って許されぬと聞いたときから、又七郎は弥一右衛門の胸中を察して気の毒がった。それから弥一右衛門の追腹、家督相続人権兵衛の向陽院での振舞い、それがもとになったの死刑、弥五兵衛以下一族の立籠りと

いう順序に、阿部家がだんだん否運に傾いて来たので、又七郎は親身のものにも劣らぬ心痛をした。

ある日又七郎が女房に言いつけて、夜ふけてから阿部の屋敷へ見舞いにやった。阿部一族は上かみに叛そむいて籠城かみめいたことをしているから、男同志は交通することが出来ない。しかるに最初からの行きがかりを知っていてみれば、一族のものを悪人として憎むことは出来ない。ましてや年来懇意にした間柄である。婦女の身としてひそかに見舞うのは、よしや後日に発覚したとて申しわけの立たぬことでもあるまいという考えで、見舞いにはやったのである。女房は夫の詞ことばを聞いて、喜んで心尽くしの品を取り揃えて、夜ふけて隣へおとずれた。これもなかなか気丈な女で、もし後日に発覚したら、罪を自身に引き受けて、夫に迷惑はかけまいと思つたのである。

阿部一族の喜びは非常であつた。世間は花咲き鳥歌う春であるのに、不幸にして神仏にも人間にも見放されて、かく籠ろうきよ居よしている我々である。それを見舞うてやれという夫も夫、その言いつけを守つて来てくれる妻も妻、実にありがたい心がけだと、心しんから感じた。女たちは涙を流して、こうなり果てて死ぬるからは、世の中に誰一人菩提ぼだいを弔とむろうてくれるものもあるまい、どうぞ思い出したら、一遍の回向えこうをしてもらいたいと頼んだ。子供たち

は門外へ一足も出されぬので、ふだん優しくしてくれた柄本の女房を見て、右左から取りすがって、たやすく放して帰さなかつた。

阿部の屋敷へ討手の向う前晩になつた。柄本又七郎はつくづく考えた。阿部一族は自分と親しい間柄である。それで後日の咎めもあるうかとは思ひながら、女房を見舞いにまでやつた。しかしいよいよ明朝は上の討手が阿部家へ来る。これは逆賊を征伐せられるお上の軍も同じことである。御沙汰には火の用心をせい、手出しをするなど言つてあるが、武士たるものがこの場合に懐手をして見ていられたものではない。情けは情け、義は義である。おれにはせんようがあると考えた。そこで更闌けて抜き足をして、後ろ口から薄暗い庭へ出て、阿部家との境の竹垣の結び繩をことごとく切つておいた。それから歸つて身支度をして、長押にかけた手檜をおろし、鷹の羽の紋の付いた鞆を払つて、夜の明けののを待つていた。

討手として阿部の屋敷の表門に向うことになつた竹内数馬は、武道の誉れある家に生まれたものである。先祖は細川高国の手に属して、強弓の名を得た島村弾正貴則である。享禄四年に高国が摂津国尼崎に敗れたとき、弾正は敵二人を両腋に

挟はさんで海に飛び込んで死んだ。弾正の子市兵衛は河内の八隅やすみけ家に仕えて一時八隅と称したが、竹内たけのうちこえ越を領することになって、竹内たけのうちと改めた。竹内市兵衛の子吉兵衛は小西の丸の陣羽織をもらった。朝鮮征伐のときには小西家の人質として、李王宮に三年押し籠こめられていた。小西家が滅びてから、加藤清正に千石で召し出されていたが、主君と物争いをして白昼に熊本城下を立ち退いた。加藤家の討手に備えるために、鉄砲に玉をこめ、火縄に火をつけて持たせて退いた。それを三斎が豊前で千石に召し抱えた。この吉兵衛に五人の男子があつた。長男はやはり吉兵衛と名のつたが、のち剃てい髪はつして八隅見山けんざんといつた。二男は七郎右衛門、三男は次郎太夫、四男は八兵衛、五男がすなわち数馬である。数馬は忠利の児小姓こしょうを勤めて、島原征伐のとき殿様のそばにいた。寛永十五年二月二十五日細川の手ものが城を乗り取ろうとしたとき、数馬が「どうぞお先手さきてへおつかわし下されい」と忠利に願つた。忠利は聴かなかつた。押し返してねだるように願うと、忠利が立腹して、「小倅こせがれ、勝手にうせおれ」と叫んだ。数馬はそのとき十六歳である。「あつ」と言いさま駈け出すのを見送つて、忠利が「怪我をするなよ」と声をかけた。乙名島おとな徳右衛門、草履取ぞうりとり一人、槍持やりもち一人があとから続いた。主従四人である。城から打ち出

す鉄砲が烈しいので、島が数馬の着ていた猩々緋の陣羽織の裾をつかんであとへ引いた。数馬は振り切つて城の石垣に攀じ登る。島も是非なくついて登る。とうとう城内にはいつて働いて、数馬は手を負つた。同じ場所から攻め入つた柳川の立花飛騨守宗茂は七十二歳の古武者で、このときの働きぶりを見ていたが、渡辺新弥、仲光内膳と数馬との三人が天晴れであつたと言つて、三人へ連名の感状をやつた。落城ののち、忠利は数馬に関兼光の脇差をやつて、禄を千百五十石に増した。脇差は一尺八寸、直焼無銘、横鏢、銀の九曜の三並びの目貫、赤銅縁、金拵えである。目貫の穴は二つあつて、一つは鉛で埋めてあつた。忠利はこの脇差を秘蔵していたので、数馬にやつてからも、登城のときなどには、「数馬あの脇差を貸せ」と言つて、借りて差したこともたびたびある。

光尚に阿部の討手を言いつけられて、数馬が喜んで詰所へ下がると、傍輩の一人がささやいた。

「奸物にも取りえはある。おぬしに表門の采配を振らせるとは、林殿にしてはよく出来た」

数馬は耳をそばだてた。「なにこのたびのお役目は外記が申し上げて仰せつけられたの

か」

「そうじゃ。外記殿が殿様に言われた。数馬は御先代が出格のお取立てをなされたものじや。ご恩報じにあれをおやりなされいと言われた。もつけの幸いではないか」

「ふん」と言つた数馬の眉間みけんには、深い皺しわが刻きまれた。「よいわ。討死するまでのことじや」
 こう言い放つて、数馬はついと起つて館やかたを下がった。

このときの数馬の様子を光尚が聞いて、竹内の屋敷へ使いをやつて、「怪我をせぬように、首尾よくいたして参れ」と言わせた。数馬は「ありがたいお詞ことばをたしかに承つたと申し上げて下されい」と言つた。

数馬は傍輩の口から、外記が自分を推してこのたびの役に当らせたのだと聞くや否や、即時に討死をしようと決心した。それがどうしても動かすことの出来ぬほど堅固な決心であつた。外記はご恩報じをさせると言つたということである。この詞ははからず聞いたのであるが、実は聞くまでもない、外記が薦すすめるには、そう言つて薦めるにきまつている。こう思うと、数馬は立つてもすわつてもいられぬような気がする。自分は御先代の引立てをこうむつたには違ひない。しかし元服をしてからのちの自分は、いわば大勢の近習きんじゆのうちの一りで、別に出色のお扱いを受けてはいない。ご恩には誰も浴している。ご恩報じ

を自分に限ってしなくてはならぬというのは、どういう意味か。言うまでもない、自分は殉死するはずであったのに、殉死しなかったから、命がけの場所にやるといっているのである。命は何時でも喜んで棄てるが、さきにしておくれた殉死の代りに死のうとは思わない。今命を惜しまぬ自分が、なんで御先代の中陰の果ての日に命を惜しんだであろう。いわれのないうことである。畢ひつきょう 竟じつこん どれだけのご入じつこん 懇こん になつた人が殉死するという、はつきりした境はない。同じように勤めていた御近習の若侍のうちに殉死の沙汰がないので、自分もなからえていた。殉死してよいことなら、自分は誰よりもさきにする。それほどのことは誰の目にも見えているように思っていた。それにとうにするはずの殉死をせずにいた人間として極ごく 印いん を打たれたのは、かえすがえすも口惜しい。自分はすぐこの出来ぬ汚れを身に受けた。それほどの辱はじ を人に加えることは、あの外記でなくては出来まい。外記としてはさもあるべきことである。しかし殿様がなぜそれをお聴きいれになつたか。外記に傷つけられたのは忍ぶことも出来よう。殿様に棄てられたのは忍ぶことが出来ない。島原で城に乗り入ろうとしたとき、御先代が呼び止めなされた。それはお馬廻りのものがわざと先手さきで に加わるのをお止めなされたのである。このたび御当主の怪我をするなどおっしゃるのは、それとは違う。惜しい命をいたわれとおっしゃるのである。それがなんのありが

たかろう。古い創きずの上を新たに鞭むちうたれるようなものである。ただ一刻も早く死にたい。死んですがれる汚れではないが、死にたい。犬死でもよいから、死にたい。

数馬はこう思うと、矢も楯たてもたまらない。そこで妻子には阿部の討手を仰せつけられたとだけ、手短てみじかに言い聞かせて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人たちは皆安堵あんどして死につくという心持ちでいたのに、数馬が心持ちは苦痛を逃れるために死を急ぐのである。乙名島徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をしたほかには、一家のうちに数馬の心底を汲くみ知ったものがない。今年二十一歳になる数馬のところへ、去年来たばかりのまだ娘らしい女にようぼう房は、当歳の女の子を抱いてうろうろしているばかりである。

あすは討入りという四月二十日の夜、数馬は行水を使って、月さかやき題を剃そって、髪には忠利に拝領した名香初音なつかはつねを焚たき込めた。白無垢しろむくに白しろだすき櫛しよ、白鉢巻しろはちまきをして、肩あいじろしに合あ印いんの角取紙すみとりがみをつけた。腰に帯びた刀は二尺四寸五分の正盛まさもりで、先祖島村弾正が尼崎で討死したとき、故郷に送った記念かたみである。それに初陣ういじんの時拝領した兼光を差し添えた。門口には馬がいなないている。

手槍を取って庭に降り立つとき、数馬は草鞋わらじの緒おを男おとこ結むすびにして、余った緒を小刀で切つて捨てた。

阿部の屋敷の裏門に向うことになった高見権右衛門はもと和田氏で、近江国和田に住んだ和田但馬守たじまのかみの裔すえである。初め蒲生賢秀がもうかたひでにしたがっていたが、和田庄五郎の代に細川家に仕えた。庄五郎は岐阜、関原の戦いに功のあったものである。忠利の兄与一郎ただた隆かの下についていたので、忠隆が慶長五年大阪で妻前田氏の早く落ち延びたために父の勘気を受け、入道休無きゆうむとなつて流浪したとき、高野山や京都まで供をした。それを三斎が小倉へ呼び寄せて、高見氏を名のらせ、番頭ばんがしらにした。知行五百石であつた。庄五郎の子が権右衛門である。島原の戦いに功があつたが、軍令にそむいた廉かどで、一旦役を召し上げられた。それがしばらくしてから帰参して側者頭そばものがしらになつていたのである。権右衛門は討入りの支度するとき黒羽二重の紋附きを着て、かねて秘蔵していた備前長船おさふねの刀を取り出して帯びた。そして十文字の槍を持つて出た。

竹内数馬の手に島徳右衛門がいるように、高見権右衛門は一人の小姓を連れている。阿部一族のこのあつた二三年前の夏の日に、この小姓は非番で部屋に昼寝をしていた。そこへ相役の一人が供先から帰つて真裸まはだかになつて、手桶ておけを提さげて井戸へ水を汲みに行きかけたが、ふとこの小姓の寝ているのを見て、「おれがお供から帰つたに、水も汲んでくれ

ずに寝ておるかい」と言いざまに枕を蹴った。小姓は跳ね起きた。

「なるほど。目がさめておつたら、水も汲んでやろう。じゃが枕を足蹴にするということがあるか。このままには済まんぞ」こう言つて抜打ちに相役を大袈裟に切った。

小姓は静かに相役の胸の上にまたがつて止めを刺して、乙名の小屋へ行つて仔細を話した。「即座に死ぬるはずでござりましたが、ご不審もあろうかと存じまして」と、肌を脱いで切腹しようとした。乙名が「まず待て」と言つて権右衛門に告げた。権右衛門はまだ役所から下がつて、衣服も改めずにいたので、そのまま館へ出て忠利に申し上げた。忠利は「尤ものことじゃ。切腹にはおよばぬ」と言つた。このときから小姓は権右衛門に命を捧げて奉公しているのである。

小姓は箆を負い半弓を取つて、主のかたわらに引き添つた。

寛永十九年四月二十一日は麦秋によくある薄曇りの日であつた。

阿部一族の立て籠つている山崎の屋敷に討ち入ろうとして、竹内数馬の手のものは払暁に表門の前に来た。夜通し鉦太鼓を鳴らしていた屋敷のうちが、今はひっそりとして空家かと思われるほどである。門の扉は鎖してある。板塀の上に二三尺伸びている夾

竹桃ちくとうの木末うらには、蜘蛛くものいがかかっている、それに夜露が真珠つばめのように光っている。燕つばめが一羽どこからか飛んで来て、つと塀のうちに入った。

数馬は馬を乗り放つて降り立つて、しばらく様子を見ていたが、「門をあけい」と言った。足軽が二人塀を乗り越してうちにはいった。門の廻りには敵は一人もいないので、錠前を打ちこわして貫かんの木を抜いた。

隣家の柄本又七郎は数馬の手のものが門をあける物音を聞いて、前夜結び縄を切つておいた竹垣を踏み破つて、駈け込んだ。毎日のように往ゆ来きして、隅々すみずみまで案内を知つて入る討手のものを一人一人討ち取ろうとして控えていた一族の中で、裏口に人のけはいのするのに、まず気のついたのは弥五兵衛である。これも手槍を掲げて台所へ見に出た。

二人は槍の穂先と穂先とが触れ合うほどに相対した。「や、又七郎か」と、弥五兵衛が声をかけた。

「おう。かねての広言がある。おぬしが槍の手並みを見に来た」

「ようわせた。さあ」

二人は一歩しぎって槍を交えた。しばらく戦ったが、槍術は又七郎の方が優れていたの

で、弥五兵衛の胸板をしたたかにつき抜いた。弥五兵衛は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引こうとした。

「卑怯ひきよつじゃ。引くな」又七郎が叫んだ。

「いや逃げはせぬ。腹を切るのじゃ」言いすてて座敷にはいった。

その刹那せつなに「おじ様、お相手」と叫んで、前髪の七之丞が電光のごとくに飛んで出て、又七郎の太股ふとももをついた。入懇じつこんの弥五兵衛に深手を負わせて、覚えず気が弛ゆるんでいたの
で、手練の又七郎も少年の手にかかったのである。又七郎は槍を棄ててその場に倒れた。

数馬は門内に入って人数を屋敷の隅々に配った。さて真つ先に玄関に進んでみると、正面の板戸が細目にあけてある。数馬がその戸に手をかけようとすると、島徳右衛門が押し隔てて、詞せわしくささやいた。

「お待ちなさりませ。殿は今日の総大将じゃ。それがしがお先をいたします」

徳右衛門は戸をがらりとあけて飛び込んだ。待ち構えていた市太夫の槍に、徳右衛門は右の目をつかれてよろよろと数馬に倒れかかった。

「邪魔じゃ」数馬は徳右衛門を押し退けて進んだ。市太夫、五太夫の槍が左右のひわらをつき抜いた。

添島九兵衛、野村庄兵衛が続いて駆け込んだ。徳右衛門も痛手に屈せず取って返した。このとき裏門を押し破つてはいった高見権右衛門は十文字槍をふるって、阿部の家来どもをつきまくって座敷に來た。千場ちば作兵衛も続いて籠こみ入った。

裏表二手のものどもが入り違えて、おめき叫んで衝ついて來る。障子襖は取り払つてあつても、三十畳に足らぬ座敷である。市街戦の惨状が野戦よりはなはだしいと同じ道理で、皿さらに盛られた百ひやく虫ちゅうの相啖あいくらうにもたとえつべく、目も当てられぬありさまである。

市太夫、五太夫は相手きらわず槍を交えているうち、全身に数えられぬほどの創きずを受けた。それでも屈せずに、槍を棄てて刀を抜いて切り廻っている。七之丞はいつのまにか倒れている。

太股ふとももをつかれた柄本又七郎が台所に伏していると、高見の手のものが見て、「手をお負おいなされたな、お見事じや、早うお引きなされい」と言つて、奥へ通り抜けた。「引く足があれば、わしも奥へはいるが」と、又七郎は苦々しげに言つて齒は咬がみをした。そこへ主のあとを慕つて入り込んだ家来の一人が駈けつけて、肩にかけて退いた。

今一人の柄本家の被官ひかん天草平九郎というものは、主の退のき口くちを守つて、半弓をもつて目にかかる敵を射ていたが、その場で討死した。

竹内数馬の手では島徳右衛門がまず死んで、ついで小頭添島九兵衛が死んだ。

高見権右衛門が十文字槍をふるつて働く間、半弓を持った小姓はいつも槍脇やりわきを詰めて敵を射ていたが、のちには刀を抜いて切つて廻つた。ふと見れば鉄砲で権右衛門をねらつてゐるものがある。

「あの丸たまはわたくしが受け止めます」と言つて、小姓が権右衛門の前に立つと、丸が来てあつた。小姓は即死した。竹内の組から抜いて高見につけられた小頭千場作兵衛は重手おもてを負つて台所に出て、水瓶みずかめの水を呑んだが、そのままそこにへたばつていた。

阿部一族は最初に弥五兵衛が切腹して、市太夫、五太夫、七之丞はどうとう皆深手に息が切れた。家来も多くは討死した。

高見権右衛門は裏表の人数を集めて、阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋くすを崩させて、それに火をかけた。風のない日の薄曇りの空に、煙がまっすぐにのぼつて、遠方から見えた。それから火を踏み消して、あとを水でしめして引き上げた。台所にいた千場作兵衛、そのほか重手を負つたものは家来や傍輩が肩にかけて続いた。時刻はちょうど未ひつじの刻であつた。

光尚はたびたび家中のおもだつたものの家へ遊びに往くことがあつたが、阿部一族を討ちにやつた二十一日の日には、松野左京の屋敷へふつきょう 扨 暁から出かけた。

やかた 館のあるお花 はなばたけ 畠からは、山崎はすぐ向うになつているので、光尚が館を出るとき、阿部の屋敷の方角に人声物音がするのが聞こえた。

「今討ち入つたな」と言つて、光尚は駕籠かごに乗つた。

駕籠がようよう一町ばかりいつたとき、注進があつた。竹内数馬が討死をしたことは、このときわかつた。

高見権右衛門は討手の総勢を率いて、光尚のいる松野の屋敷の前まで引き上げて、阿部の一族を残らず討ち取つたことを執奏してもらつた。光尚はじきに逢おうと言つて、権右衛門を書院の庭に廻らせた。

ちようど卵たまごの花の真つ白に咲いている垣かきの間に、小さい枝折戸しおりどのあるのをあけてはいつて、権右衛門は芝生の上に突居た。光尚が見て、「手を負つたな、一段骨折りであつた」と声をかけた。黒羽くろはぶたえ二重の衣服が血みどれになつて、それに引上げのとき小屋の火を踏み消したとき飛び散つた炭や灰がまだらについていたのである。

「いえ。かすり創きずでござりまする」権右衛門は何者かに水落みずおちをしたたかつかれたが懐中

していた鏡にあたって穂先がそれた。創はわずかに血を鼻紙ににじませただけである。

権右衛門は討入りのときのめいめいの働きをくわしく言上して、第一の功を単身で弥五兵衛に深手を負わせた隣家の柄本又七郎に譲った。

「数馬はどうじやつた」

「表門から一足先に駈け込みましたので見届けません」

「さようか。皆のものに庭へはいれと言え」

権右衛門が一同を呼び入れた。重手おもてで自宅へ昇かいて行かれた人たちのほかは、皆芝生に平伏した。働いたものは血によごれている、小屋を焼く手伝いばかりしたものは、灰ばかりあびている。その灰ばかりあびた中に、畑十太夫がいた。光尚が声をかけた。

「十太夫、そちの働きはどうじやつた」

「はっ」と言っただぎり黙つて伏していた。十太夫は大だい兵ひょうの臆病者で、阿部が屋敷の外をうろついでいて、引上げの前に小屋に火をかけたとき、やつとおずおずはいったのである。最初討手を仰せつけられたときに、お次へ出るところを劍術者新免武蔵しんめんむさしが見て、

「冥加みょうが至極しごくのことじゃ、ずいぶんお手柄をなされい」と言つて背中をぼんと打った。十

太夫は色を失つて、ゆるんでいた袴はかまの紐ひもを締め直そうとしたが、手がふるえて締まらな

ったそうである。

光尚は座を起つとき言った。「皆出精であつたぞ。帰つて休息いたせ」

竹内数馬の幼い娘には養子をさせて家督相続を許されたが、この家はのちに絶えた。高見権右衛門は三百石、千場作兵衛、野村庄兵衛は各五十石の加増を受けた。柄本又七郎へは米田監物が承つて組頭谷内蔵之允を使者にやつて、賞詞があつた。親戚朋友がよろこびを言いに来ると、又七郎は笑つて、「元龜天正のころは、城攻め野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶の子じや」と言つた。二年立つて、正保元年の夏、又七郎は創が癒えて光尚に拝謁した。光尚は鉄砲十挺を預けて、「創が根治するように湯治がしたくばいたせ、また府外に別荘地をつかわすから、場所を望め」と言つた。又七郎は益城小池村に屋敷地をもらった。その背後が藪山である。「藪山もつかわそうか」と、光尚が言わせた。又七郎はそれを辞退した。竹は平日もご用に立つ。戦争でもあると、竹束がたくさんいる。それを私に拝領しては気が済まぬというのである。そこで藪山は永代御預けということになつた。

畑十太夫は追放せられた。竹内数馬の兄八兵衛は私に討手に加わりながら、弟の討死の

場所に居合わせなかつたので、閉門を仰せつけられた。また馬廻りの子で近習を勤めていた某は、阿部の屋敷に近く住まっていたので、「火の用心をいたせ」と言つて当番をゆるされ、父と一しよに屋根に上がつて火の子を消していた。のちにせつかく当番をゆるされた思おぼしめ召しにそむいたと心づいてお暇いとまを願つたが、光尚は「そりや臆病ではない、以後はもう少し気をつけるがよいぞ」と言つて、そのまま勤めさせた。この近習は光尚の亡くなつたとき殉死した。

阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗つてみたとき、柄本又七郎の槍に胸板をつき抜かれた弥五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であつたので、又七郎はいよいよ面目を施した。

大正二年一月

青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 森鷗外（二）」中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：進恵子

2000年2月14日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

阿部一族

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>